

新国絵図清書の報告書

「元禄国御絵図仕立覚」について

川村 博忠

一、同覚帳の成立

元禄一〇（一六九二）年に着手した国絵図改訂で、幕府は全国八三枚から成る新国絵図と三枚から成る日本全図を収庫したが、これらの国絵図の大部分は幕府御用絵師狩野良信によって清書された。この国絵図事業の成就した元禄一五年一二月、狩野良信はこれら国絵



写真 元禄国御絵図仕立覚（部分）

図清書の報告書を幕府へ提出している。現在、栗田文庫に所蔵される「元禄国御絵図仕立覚」（和綴一冊、三七丁）はその写しと思われる。

この史料については既に秋岡武次郎氏がその著『日本地図作成史』（鹿島研究所出版会、昭四六）の中で簡単に触れられているが、それによるとこの覚帳一冊は昭和一二（一九三七）年に弘文荘待買古書目録に載り、

栗田元次氏によって購入されたものだという。

筆者はこのほど栗田文庫の管理者である栗田憲次氏の御配慮を得て同覚帳を閲覧させていただいた。そしてさきに拙稿「元禄年間の国絵図改訂と新国絵図の性格について」（人文地理二九一六）の中で同覚帳を史料として利用したが、同覚帳の内容を十分紹介することはできなかった。同覚帳は元禄国絵図事業の全体像を知るうえできわめて有益かつ貴重な史料であることから、その内容を十分紹介する必要を感じ、本小稿を思い立った。

二、同覚帳の内容

同覚帳には表題が欠けている。しかし栗田元次氏が「元禄国御絵図仕立覚」の題目をもつて整理されていることと、同帳の表紙に上張りがあったが破損している形跡があることから、栗田氏が入手された時点においては同表題が付されていたものと推定される。内容はその冒頭に、

伊豆国御絵図 縦七尺五寸 宛式枚
横七尺四寸九寸

御絵図之表七尺四寸四寸坪ニ付銀七匁宛

此坪数五百式拾七匁五分

銀高合三貫六百五拾目五分

とあり、続いて安房・相模・河内・武蔵・上総の各国絵図が同様形式で一頁ごとに記載されている。この六カ国の国絵図のあとには、

日本御絵図三枚 縦七尺五寸
横七尺五寸

但、一枚ニ付金五拾兩宛、銀ニノ九貫目

己年被仰付午極月出来

とあって、清書代の小計、そのあとに「右六カ国並日本御絵図三枚者本郷御絵図小屋ニ而出来」と記されている。以上六カ国の国絵図および日本図は、この事業を指揮した幕府絵図奉行の受持で作成されたことが知られる。

続いて飛騨・長門・周防・安芸・土佐の順で各一頁毎に次々に五枚の国絵図について縦・横寸法、清書枚数、坪当り単価、絵図面の坪数（一尺四方を一坪に換算）、清書代金、絵図元（受持大名）およびその絵図役人名が記載されている。例えば安芸国絵図には、

安芸国御絵図 縦壹丈壹尺七寸 宛貳枚
横壹丈三尺八寸六分

御絵図之表壹尺四方壹坪ニ付、銀拾七匁五分宛

此坪数三百式拾四坪三合式勺四才

銀高合五貫六百七拾五匁六分七厘

御絵図役人

松平安芸守様 明石吉大夫殿

脹部金左衛門殿

これら国絵図五八図の各清書代算出明細のあとに、清書代の総合計が「惣銀高合四百六拾貳貫八百五拾八匁七厘三毛、此金七千七百拾四兩壹分銀三匁八分七厘三毛、但兩替六拾目也」とあり、次いで

尾張国御絵図

御絵図役人

尾張中納言様 梶又左衛門殿

横地仁兵衛殿

紀伊国御絵図

御絵図役人

紀伊大納言様

田中勘八殿

笠原忠三郎殿

絵師

并河甫仙

右式ヶ国者御手前絵師ニ而御調、御絵図仕立之儀者狩野良信並弟子磯野弥兵衛御屋敷江参上出来之分

さらに続いて薩摩・大隅・日向・琉球（松平薩摩守）、近江（井伊掃部頭）各国絵図について尾張・紀伊と同様の記載がある。そのあとに甲斐（甲府中納言）・常陸（水戸宰相）・陸奥仙台領（松平陸奥守）・上野（酒井雅楽頭）・下野（安部対馬守）・陸奥津輕領（津輕越中守）・えぞ（松前志摩守）・佐渡嶋（荻原近江守）の各絵図について「右是者御手前ニ而出来」と記され、最後には、
右御国絵図貳枚宛、元祿十五年被仰付当午十二月不残出来、壹枚宛者御納戸江納、壹枚宛者御勘定所江上納相済申候

元祿十五年十二月

狩野良信

御絵図御奉行

井上大和守様

安藤筑後守様

（以下五名省略）

と、この覚帳の提出者名と宛名が列挙されている。

三、国絵図清書の明細

同覚帳の記載によると、狩野良信によって清書された献上絵図は国絵図六四図各二枚ずつ、それに日本全図三枚を加えた計一三一枚

狩野良信清書図とその清書代

図幅	坪数 (坪)	坪単価 (匁)	清書代2枚分 (貫・匁)
伊豆	521.500	7.0	3.650.500
安房	203.830	9.5(詰)	1.936.380
相模	264.290	7.0	1.850.030
河内	145.200	9.5(詰)	1.379.400
武蔵	691.680	7.0	4.841.760
上総	388.000	7.0	2.716.000
日本図			9.000.000✧
飛騨	437.580	7.0	3.063.060
長門	521.700	17.5	9.129.750
周防	626.400	17.5	10.962.000
安芸	324.324	17.5	5.675.670
備後	379.757	17.5	6.645.730
土佐	1114.000	17.5	19.547.500
筑前	326.196	17.5	5.708.430
若狭	264.100	17.5	4.621.750
丹波	472.285	17.5	8.264.987
讃岐	380.760	17.5	6.663.300
丹後	257.040	17.5	4.498.200
志摩	88.000	17.5	1.540.000
但馬	258.330	25.0(詰)	6.458.250
阿波	508.080	17.5	8.891.400
淡路	127.400	17.5	2.229.500
伊賀	81.065	17.5	1.418.600

図幅	坪数 (坪)	坪単価 (匁)	清書代2枚分 (貫・匁)
伊勢	473.620	17.5	8.288.350
美作	246.450	17.5	4.234.500
美濃	767.550	17.5	13.432.125
備前	245.440	17.5	4.295.200
石見	521.380	17.5	9.124.850
備中	229.500	17.5	4.016.250
伊予	1225.000	17.5	21.437.500
豊前	318.080	17.5	5.566.400
播磨	339.160	17.5	5.935.300
三河	421.036	17.5	7.368.130
沓岐	85.800	17.5	1.501.500
対馬	136.880	17.5	2.395.400
摂津	216.944	17.5	3.796.520
因幡	192.584	17.5	3.370.220
伯耆	257.849	17.5	4.512.357
筑後	231.125	17.5	4.044.700
出雲	292.740	17.5	5.122.950
隠岐	153.640	17.5	2.688.700
大和	430.005	17.5	7.525.870
豊後	631.800	17.5	11.056.500
駿河	398.179	17.5	6.968.130
肥前	853.140	17.5	14.929.950
肥後	810.231	17.5	14.179.044

図幅	坪数 (坪)	坪単価 (匁)	清書代2枚分 (貫・匁)
遠江	393.390	25.0(詰)	9.834.750
山城	217.620	25.0(詰)	5.440.500
越前	452.610	17.5	7.920.675
下総	436.400	17.5	7.637.000
出羽秋田領	977.325	17.5	17.103.180
加賀	425.843	17.5	7.452.256
能登	350.501	17.5	6.133.771
越中	494.892	17.5	8.660.624
陸奥福島領	154.880	17.5	2.710.400
陸奥南部領	789.520	17.5	13.816.660
陸奥磐城・相馬・棚倉領	427.160	17.5	7.475.300
陸奥三春・白川・二本松領	337.509	17.5	5.907.825
出羽庄内領	331.700	17.5	5.638.900
出羽米沢領	187.680	17.5	3.284.200
出羽新庄領	228.960	25.0(詰)	5.724.000
出羽山形領	295.240	25.0(延)	7.381.000
信濃	968.058	17.5	16.941.015
越後岩船・蒲原郡	687.820	17.5	12.036.850
越後高田・長岡領	873.000	17.5	15.277.500

惣銀高合462貫858匁7厘3毛、此金7.714両1分銀
3匁8分7厘3毛
✧日本図は3枚分
(詰)は詰絵図、(延)は延絵図

であった。これら清書代の総計は銀高四六二貫余であり、当時の公定相場の六〇目替えにより、良信はこの仕事で実に金子七、七一四両余の収入を得ている。絵図清書代は一尺四方を一坪とする単位で各絵図の大きさ（坪数）を測定し、坪単価に基づいてそれぞれの値段が算出された。全国の国絵図のうち狩野良信によって清書された各絵図の坪数とその単価および清書代は別表の通りである。ただこの覚帳に載る数値には端数部分での計算違いが少なくない。また末尾記載の総計も各絵図の清書代の合計と正確には一致しない。

幕府絵図奉行受持の六カ国ならびに飛騨（関東郡代兼飛騨代官伊奈半左衛門受持）は坪単価が七匁と安く、大名受持分の単価は一七匁五分であり二倍以上であった。ただ幕府受持のうち安房・河内、大名受持のうち但馬・遠江・山城・出羽新庄・同山形はそれぞれ坪当り単価が割高となっている。これらのうち出羽山形領絵図には「但延絵図御直段」との付記があり、その他の単価割高の各絵図には「但詰絵図御直段」と付記されている。新国絵図の作成に際しては一里六寸縮尺の厳守が指示されたため、これら各絵図は下絵図より清書される際に、基準に合うよう縮尺の拡大あるいは縮小の操作が加えられたため、清書代の単価が割高となったものと考えられる。

四 和泉・会津両絵図の記載洩れ

同覚帳に記載された国絵図は全部で八一枚、これに日本図三枚が加わる。このうち、狩野良信清書分が国絵図六四枚、日本図三枚、手前絵師清書分は国絵図一七枚とに区分けできる。

尾張・紀伊・常陸などの親藩、および薩摩・仙台・彦根などの雄

藩では良信に清書が依頼されず、手前絵師によって献上図が仕上げられているのが注目される。

ところで『幕府書物方日記』（大日本近世史料）に載る国絵図出納の記録を整理すると、新国絵図の枚数は全国あわせて八三枚である。従って同覚帳に掲載されている諸国の国絵図を逐一点検したところ、同覚帳には和泉・陸奥会津の二枚の記載洩れがあることが判明した。

結局、元祿年間の国絵図改訂で成立した新国絵図は全国あわせて八三枚であった。これに日本図三枚を加えて収庫されたのである。国絵図は一国一図葉が原則であったが、国域の広い陸奥は七枚、出羽五枚、越後二枚、また島嶼の多い琉球は三枚に分割作成された。ただ、これら分割作成の国絵図のうち、琉球の場合は三枚一組をもつて一図葉と考えたほうが妥当かも知れない。そうすれば新国絵図は全部で八一図、枚数で八三枚ということになる。

陸奥・出羽・越後の各分割絵図は絵図元も絵図題目もそれぞれ異なっており、各図はそれぞれ独立した存在である。しかし琉球の場合は大島・沖縄島・八重山島を中心とする三枚に分割作成されたものの、絵図元はいずれも松平（島津）薩摩守であり、絵図添え書きの題目も「琉球図之内高都合並嶋色分目録」の同一表現である。同覚帳の掲載で陸奥・出羽・越後の各分割絵図はそれぞれ独立して、例えば「陸奥国仙台領御絵図」「陸奥国津軽領御絵図」の如く個別に記載されているが、琉球の場合は「琉球国御絵図」として三枚が一括して扱われている。

（佐世保工専）